



避難所の気負へるだるまストーブよ
秋出水てらてら残るカーブミラー
方頭魚出陣のごと頭を揃へ
夜叉五倍子の実や山姥のひよいひよいと
馬鈴薯の土こそ十勝開拓史
屋根歩く鳥の足音風炉名残
芋の露蒼天ぎゅつと引き絞る
新蕎麦や今を愛せば生き易し
月の夜や錆色の湯に浸かる壱岐
齒ごたへのなき林檎買ふボローニヤ
木の葉散る時を螺旋に刻みつつ
*
死ぬるとき素顔にもどる手負猪
青き頭に剃り上げてみむ今朝の冬
秋晴や雑巾持てば見えるもの
のこる虫一番近き星は妣

堤 保徳
岩井かりん
清水逍径
久保美智子
許勢元貞
窪田英治
野口美智子
芳川莞久子
山田勝文
竹岡みち子
島田裕子
志摩晴樹
水野星闇
宮澤和子
田中純子

黒部の瀬流し網漁鮭を揚ぐ
霽 霰 雪 霽 霰 雪 来る
りんご畑奥に新幹線墓場
畔の穂の放肆朗らか豊の秋
鰯雲はるか彼方に宇宙基地
冬薔薇逝くごと嫁にゆきにけり
蓑虫や蓑は戦に役立たず
鳥突つく林檎かじれば鳥心地
落鮎に千曲川の水尾の瀬音さび
仮縫のやうな人生鰯雲

山本正子
木村由里子
西村美枝
松本よし乃
降旗 康
小谷一夫
岩間嘉一
西沢喜代子
甲田和利
倉科繁登

空と膝の機嫌診てをり今朝の冬
だつてとかでもとかやめな唐辛子
雪明り蘿^{かが}摩^みの莢を鳴らすかな
冬始めかけそば一杯長野駅
アスファルト落葉に走る足がある

青木義典
珠^{たま}風^{なぎ}夕^{せき}波^は
石田九^こ吾^あ
山岸俊一
佐藤悦雄

岳の源泉 一月 (485)

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

はじめに。中村哲さんが十二月四日にアフガニスタンのジャラーラーバードで武装勢力により殺害された。七十三歳。カカ・ムラド（ナカムラのおじさん）は世界の誇り、人類の希望であった。医療の他に、井戸を掘る。砂漠を緑地化して人間が暮す地を取り戻す。そこに命をかけた。本当の人間とは哲さんのような人をいう。今月から哲さんにあやかり、タイトルを「岳の源泉」とした。

秋出水―泥だけが残る廢墟

秋出水―泥だけが残るカーブミラー 岩井かりん
海には津波、陸には洪水。島国の地球は安泰ではない。地球そのものが宇宙の島国のようだ。作者の居住地千曲川の氾濫詠。梅雨の出水に対して秋出水、洪水がある。泥に埋まり道路標識のカーブミラーだけが光っている。無惨。天を仰いで怨む以外に怒りの持って行きようがない。無力。
方頭魚出陣のごと頭を揃へ 清水 道徑
食い初めに使われる魚。ホウボウ科カナガシラ属。頭が大きい。知者のような目が印象的。業者に買われる前に魚市場に並んださまか。比喻に勢いがある。
夜叉五倍子の実や山姥のひよいひよいと 久保美智子

ドライフラワーにでもするのか、洒落た山姥。飛躍した連想ではなく、どこかわが身を重ねているのがいいか。
馬鈴薯の土こそ十勝開拓史 許勢 元貞
十勝名産馬鈴薯。そこについていた土。原点は土からすべてが始まる。北海道の食糧七〇パーセントは帯広を中心とする十勝平野が産み出すと、先年、鈴木八駄郎さんから伺い感動した。いま明快な句を得た。
屋根歩く鳥の足音風炉名残 窪田 英治
陰暦十月、亥の日に風炉をしまう。晩秋の最後の茶立て。茶室の屋根を歩く鳥の足音に気付くとは静謐そのもの。軽さに芯があるのが作者の修練のたまもの。
芋の露蒼天ぎゆつと引き絞る 野口美智子
力量がいかになく発揮され秋の朝の清澄感が満ちる。秀作。
新蕎麦や今を愛せば生き易し 芳川莞久子
新蕎麦は卑近だけに詠みにくい。このように直向きな表現によって格調を出す。巧みな工夫がある。力がある作者。
月の夜や錆色の湯に浸かる沓岐 山田 勝文
沓岐詠。諏訪の出の曾良が最晩年、幕府の役人として逝去したのが沓岐。作者は若くして諏訪市長を務め沓岐と姉妹都市提携を結ぶ。どこか遠国の風情が捉えられ流離感もあろう。

齒こたへのなき林檎買ふボローニヤ 竹岡みち子
西欧最古の大学があるボローニヤ。解剖学教室や二つの斜塔やマッジョーレ広場など、イタリアの旅の記憶が鮮明だ。生真面目な想像にすかさず肩透かしを。作者は生理学の専門家。どこか可笑しい、余裕がある。

木の葉散る時を螺旋に刻みつつ 島田 裕子

落葉時は時間が螺旋とは、いい発見だ。感心した。

他に雪嶺集・前山集から推薦候補作を掲げる。

草の花猫も蜥蜴も看取りけり 栗原利代子
合戦の絵図や真赭の芒刈る 篠遠 良子

今月の秀句

避難所の気負へるだるまストープよ 堤 保徳

必ずしも冬の句ではない。ストープは季語の約束では冬に分類される。ところが避難所に置かれ用をなすストープは無季。例えば、秋の出水による避難所の夜の冷えを耐えるためであれば、ストープが冬の季語との分類は該当しない。無季でいいのではないか。本来ストープは寒さ除けの冬のもの。しかし、時に災害時などに重宝されれば無季にもなる。季語季語とむきにならない。現場実感主義。季語を無視するわけではない。なつかしきだるまストープ。腹が大きい。

蓑虫の蓑は戦に役立たずとの着想

白樺は無心の白さ鳥渡る 功刀たかね
鏡から退りて我や菊の宿 長崎 玲子
生きるとは楽しむことよ帰り花 土屋 忠史

蓑虫や蓑は戦に役立たず 岩間 嘉一

蓑虫の蓑は軍服からは程遠い。敗残兵のごとし。戦のイメージからは最も遠いものである。そこに意外性があり、詩情が生まれる。地味な句であるが、十分に手応えがある。

青き頭に剃り上げてみむ今朝の冬 水野 星闇

「剃り上げて青き頭や今朝の冬」ならば信念に生きる若僧を連想する。掲句は僧のイメージを抱きながら、何か決意を秘めた句と読める。誠実な作者。時に良識が身を縛り、もう一步の自由な羽ばたきを抑制している感があるが、継続は力。次第に内から充実して来た期待感がある。

秋晴や雑巾持てば見えるもの 宮澤 和子

身近な着想は主婦の体験詠。行動は支度が大事。対象への踏み込みが生まれる。家内の廊下ばかりではない、窓も庭もと、見えなかったところが面白いように見えてくる。気合や意志力が物の内側を透視するのであろう。めきめき変貌を遂げつつある新進。歩きながら考えるタイプか。

のこる虫一番近き星は妣 田中 純子

母を亡くした直後なのであろうか。胸に迫る思いがある。随筆集『滴りの言葉』を出し、情感の豊かさを見せてくれた。

黒部の瀬流し網漁鮭を揚ぐ 山本 正子
原句は下五音「をとこうた」とある。これだと黒部川への
迫り方が弱い。一般的な川魚漁を諷詠しただけ。ここは一物
表現に拘り、「鮭を揚ぐ」と明快に力を入れるのがいい。

霰 霰 雪 霰 雪 来 る 木村由里子
これでもかと、拘りの句。雪国人の根性を雪の変幻を巧み
に交えて一本ぐいと太い棒で表現した。着想が自在だ。

りんご畑奥に新幹線墓場 西村 美枝
千曲川の洪水という思わぬ出来事によって、俳句の句材が
想像もしなかった場景を捉えることになった。りんご畑の奥
に、JRの東日本管轄の新幹線が泥水を被り廃物になって置
かれている。墓場というほど多量だ。早い時期に移動できな
かったものか。過密ダイヤでは身動きがとれない。人災によ

今月の秀句

死ぬるとき素顔にもどる手負猪 志摩 晴樹

猪は全身これ気負い。牙を立て体形が猪突猛進のこと
ばさながら。ご苦労なことよ。ところが撃たれ傷を負っ
て命を落した猪あわれ。その素顔からは力が引き、穏や
かそのもの。これほど変わり果てた哀しい貌は見たこと
がないというのであろう。生きるとは何であったか、し
みじみと省みた。当然、自己を含めた人間像への思いが
ある。思索の作。

仮縫のやうな人生 鯛雲 倉科 繁登

比喻が巧い。根底には人生いかに生きるかという哲学があ
るが、難しくない。俗言すれすれを巧みに掬い上げる。掲
句がそれ。誰もが一度きりの人生を仮だとは思っていない。
しかし、振り返るとああすればよかったとの反省しきり。と
きにこんな気持になる。作者は気持が柔軟な校長先生。
他に、岳集推薦候補作を掲げる。

秋団扇やもをやもめの高笑ひ 小林 春代
畏ればいよほむらや曼珠沙華 宮坂やよい
逝くひとの真直ぐに逝く野紺菊 鎌田 文子
風呂の柚子家族の顔に譬へけり 増田 義幸
黍嵐火の出るやうなどじをふむ 永田エセ子
洋梨の幻残す宇野 浩二 久保田義夫

今月の秀句

雪明り蘿摩の莢を鳴らすかな 石田 九吾

蘿摩はがいがいも。寒さの中で白い絮毛を孕んだ莢が鳴
る。北海道の雪明りの乾燥した空気が鳴らすとは詩情が
ある。俳号はココア好きから。かつて伊藤整の詩集に
『雪明りの路』（大正十五年）があった。詩「忍路」を記
憶している。六十代の作者。北国の詩をどんどん見せて
ほしい。地貌の時代だ。

る側面もあろう。最先端のものほど死と紙一重。厳しい。
畔の穂の放肆朗らか豊の秋 松本よし乃
「放肆」は放恣と同じ。ほしいままの意。こんな字を自由
に使えるのは才能である。感心した。字への愛情が俳人には
ぜひ欲しい。一字を粗末にしない。大事なことだ。

鰯雲はるか彼方に宇宙基地 降旗 康
宇宙に人工衛星の基地がある。思えば空の鰯雲もどこか迫
力が無い。自然を人工が侵害し歪ませる。切ないではないか。
冬薔薇逝くごと嫁にゆきにけり 小谷 一夫

なんと哀しい句か。結婚するではなく、「嫁にゆく」、それ
が自分を殺してあたかも亡くなるような気持でゆく。こんな
ことがあるものかと思う反面、長い体験史の中ではあり得た
ことか。角隠しの結婚衣装が喪に服すようだという意味では
ないであろう。鋭い見方にはっとした。

鳥突つく林檎かじれば鳥心地 西沢喜代子

どんなに多忙でも休詠しない。作者の粘り強い信念に感服
している。長野県看護協会会長在任中、私も大学在職中でお
世話になった。穂苅富美子さんがよく面倒を見てくださり、
喜代子さんの背後には富美子さんの姿が浮かぶ。じわじわと
見事な句を作るようになり、感銘している。大らかで人も鳥
も惹きつける磁気が作者にはある。

落鮎に千曲川の水尾の瀬音さび 甲田 和利

小諸の後見九朗さんに誘われ入会。以来真面目。手堅い。
地味であるが、心境句に和利個性が出て、注目している。

青雲集——一年経た人は岳集へ進むかどづか自己申告を。

だつてとかでもとかやめな唐辛子 珠風 夕波
作者は二十七歳。もつと若い者への助言か。言い訳をしな
い。先生口調であるが、唐辛子と置いてきっぱがいい。さっ
ぱりしている。格言のようだが、俳句の遊びも感じられる。

空と膝の機嫌診てをり今朝の冬 青木 義典

整形、整骨の先生。「空と膝」との関わりが深い。晴れた
日、雨の日、微妙に膝が反応する。いよいよ冬。これから機
嫌をどうとるか難しい判断を迫られる日が来る。職業詠がい
い。

冬始めかけそば一杯長野駅 山岸 俊一

やさしい。僅かな詩情にほっとする。今日から冬、慌ただ
しく乗り継ぎの時間にかけてそばを啜る。善光寺さんのお膝元
長野駅がよかった。松本駅では地名がシンプルで寒すぎよ
う。この僅かな違いを味わいたい。

アスファルト落葉に走る足がある 佐藤 悦雄

推敲・添削に出したので、原句との比較はそちらを。熱心
である。いまだ対象の絞り方が十分ではないが、日常から詩
情ある句材を探そうと模索中。気力があるだけにこれからが
楽しみ。継続により必ずことは動き出す。

他に青雲集推薦候補作を掲げる。

降るほどに父母の教えや彼岸入 木下めぐみ
胎の子も聞いているのか虫の声 佐々木寿子
障子張る舌切雀想ひけり 宇内 久子

推敲・添削 60 ●●●●●●●●●● 宮坂 静生

○気になる表現

価値評価に関わる点への配慮

原句 活気ある富士急霊園秋涼し

俳句としての纏まりはいい。しかし着想が「富士急霊園」だけに「活気ある」との形容が気になる。墓地に活気のあるなしを感じることもあろう。入るならしみりさみしい墓地より華やかで活気があった方がいいと思う人もいる。理解できないことではないが、私は躊躇した。

当然すぎることは表現しても诗情が乏しい

原句 新走り人それぞれの才を持ち

原句 すんき漬く家それぞれの蘊蓄の

人がそれぞれ才を持つ。当然である。すんきの漬け方が家それぞれで違う。これも当然すぎないか。

同季の季語を重ねることの効果

原句 アスファルト落ち葉走りて冬に入る 佐藤 悦雄

「落葉」「冬に入る」はいずれも冬の季語。「冬に入る」は要らない。面白い光景だ。落葉に足があるようだとい頃感じていたので、こんな添削はどうかという意味で大胆に添削。

添削 アスファルト落葉に走る足がある

原句 退院日枯葉吹き寄せ風寒し 佐藤 悦雄

「枯葉」「風寒し」が気になる。「風寒し」は省略したい。省略した分を細部の描写へ。例えばこんな風に。

添削 足もとに枯葉吹き寄せ退院日
○このように推敲し添削する

わかりやすく表現して句に豊かさを

原句 古川の狐の祝言見る奇祭

地名「古川」であろうが、突然に古川では理解できない人が多い。そこで「飛驒」を入れたらどうか。

添削 飛驒古川狐祝言見て奇祭

言い過ぎないでその手前でとどめる

原句 手水鉢つばき一輪のぞき見る 藤森 文子

添削 手水鉢つばき一輪置かれたる

自分の感じをしっかりと表現した方がいい

原句 皇后の眼の潤むらむ十三夜 塩川 昭子

普通「らむ」は現在見ていないところで起こりつつあることを推量する。「眼外の推量」と言われている。ここは推量ではなく、私が見た表現にしたらどうか。

添削 皇后の眼潤める十三夜

括弧は要るか要らないか

原句 台風禍「この世の終り」とふ言葉 桂木 節子

括弧はなるべく付けない方がすっきりした句になる。「とふ」と引用を示す語があるので、なくてもわかる。

添削 台風禍この世の終りとふ言葉

切字の位置をどうするか。強引に切らないで、自然に切る。

原句 パレードや即位祝ひの小六月 瀬上 和雄

添削 パレードの即位祝ひや小六月